

友  
ち  
り

秋山文庫  
Ⅰ-157  
1



二ノ金	二ノ十七	二ノ十四	二ノ八	二ノ七	二ノ六	二ノ五	二ノ五	一ノ十八	一ノ十二	一ノ十一	一ノ九	一ノ八	一ノ七	一ノ六	一ノ五	一ノ三	一ノ二	枚
裏	表	裏	裏	裏	表	金	裏	表	表	裏	表	裏	裏	表	裏	裏	表	行
三	十二	二	四	二	十二	十二	六	八	十二	十三	四	五	七	九	十三	十三	九	正
白	し	點	餘	る	看	松	桑	人	陣	點	綠	點	水	白	要	事	鏡	誤
白	し	點	餘	な	省	梅	伊	入	棟	默	綠	默	月	白	腰	車	鐐	正

訂正



碧山如咲髮華新  
二十年前迹亦陳  
重入山中思打却  
當時已是爛柯人



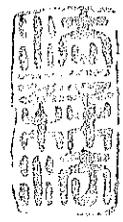
爲千葉氏

己未秋抄

擔風居士

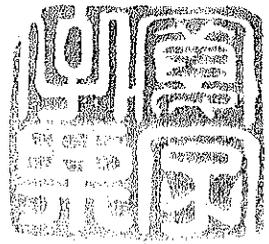


一  
回  
夏



上  
卓  
土  
坤

五  
峯  
寬  
題



近年

如言

秋却

莫不官





庭寛  
得  
多

前法皇陛下御納



已未之歲仲秋  
月官之以祝

兔月千葉何集

立机被字修寫

石雲



蘭亭



子玉乐

張華



式

一 諸禮停止

一 小語低聲

一 出合遠近

一 一句一直

一 月花一句

右は舊式を増減して貞享式の條目也

定

一 師家

古

今

庵

隨從

月

步

一 宗匠

汀

庵

隨從

月

汀

一 執筆

甘

泉

一 客對

花

笑

風

月

月

堂

月

峯

一座配

花笑

風月

月杜

月堂

月柯

月渚

月笑

月華

月信

月柯

一書記

一執事

悉記

# 友ちどり

またひ正風水音社桑名分社長を  
 繼承せられたる汀庵兎月雅老の  
 立机を祝しはた其地に風雅の盛  
 んならんことを促かし待りて

正風水音社主宰

獅子門十八世

古今庵

友よせて遊へ間遠の浦千鳥  
 仰けは冴へる道の月雪

汀庵

白練は黄にも黒にも染るらん  
 朝な夕なに鐘の鳴るなり  
 顔是なき乙は竹馬捨て来て  
 叔母の袖より菓子<sup>リ</sup>の愛想  
 待宵に萩も芒も咲競ひ  
 靴脱石に置く露の玉  
 嘶きもいご爽に神の駒  
 昔の功に樂な捨扶持  
 盆點の薄茶召さるゝ筆の隙  
 そふのないのは湧く泉さて  
 山門の内には風の薰りけり  
 憩へは直くに眠り催す  
 石田 月華 花笑 月堂 卜年 保石 風月 掬泉 月柯 月峯 雲裏 月洋

何處からか耳を劈さく午砲の音  
 降り出す雨のはらりくご  
 咲き揃ふ花の祇園に迷ひ込み  
 小鳥のように禿囀る  
 埃<sup>ニホ</sup>さへ春は目に立つ塗机  
 歌の手本の文字は鮮か  
 徳川の盛りは何時の頃ならん  
 免許を請けて開く道場  
 幸と古稀を越ゑても嬰鏡に  
 師走の空に雲の西東  
 湖に冴へて落込む日枝の鐘  
 仇な姿を包む自動車  
 月洞 月笑 風竹 一信 文好 月杜 月潜 月江 芦月 月步 梅雅 嶺雅

供申す身なから戀の無分別  
 餌をあさるのか嘴太の鳴く  
 蹲踞に影の幽かな朝の月  
 隣の家も勵む糶白  
 廣告に新酒一壺持て來て  
 吾妻訛りの交ある早口  
 進む世に點を綴りて用の足り  
 改元されてからは大正  
 城跡に薰るも花の曠なれや  
 矢立へうける和きの水

右歌仙行

無 隱 茂 里 賀 老 里 障 幽 甫 柳 甫 暮 白 雅 雄 芳 風 甘 泉

探題

木兔の鳴く暮を六部の急きけり  
 稻塚の風の抱き着く枯野哉  
 水鳥は水に寐てこそ樂しけれ  
 生佛造り出すも納豆かな  
 袈裟取て僧も交るや鮫鱗汁  
 きぬくの積る話しや霰酒  
 傘も破れん斗りや玉あられ  
 風呂ふきの馳走に合ふや嫁の里  
 道近ふつけては通ふ枯野かな  
 酔醒に水を乞はるゝ紙衣かな  
 水鳥の集ふ間遠の浦和かな  
 火炬から時を聞く身さなりにけり  
 旭を受けて黄金に光る氷柱かな

石 田 甘 泉 風 竹 卜 年 雲 裏 梅 雅 半 幽 嶺 雅 芳 風 賀 老 文 好 保 石 月 華



鍋焼や奇遇の友と夜の更ける

月歩

水仙や碑守の家の物静か

汀庵

落葉焚く煙の太し山住居

古今庵

### 餘興の巻

ゆつたりと浮くや小春の都鳥

芳風

隅田にちらほら笑む返り花

甘泉

七日目に來る日曜を樂しみて

兔月

謠曲習ふも時の流行

錦月

颯々の風に磨きし窓の月

石田

茹ても茨の青い枝豆

五形

新酒に國の譽と命名し

葉舟

猛からすして威ある兵士

景風

疎らなる半白の髻刈り込みて

皐月

あの時鐘は最早入相

紫山

さわ立ちし雲もいつしか消えて行き

月輝

涼み咄者にふと出來た仲

月籟

聞かされて扇の歌のなつかしく

賀老

千代萬代も石の動かさず

琴聲

神の國てふ名もありて尊とけれ

淡月

稚なからに大和魂

笑風

懇懃な言葉の花の美しき

古今庵

さてもものさかな山裾の家

執筆月堂

右歌仙行一折

# 祝章

兎月雅士の立机の式を保喜して

式祝ふ曠や間遠の浦千鳥 美濃 東西仙 雪 鴻

汀庵兎月雅老の正風水音社桑名分社長を繼承せられたるを祝して

一灣の間遠や冴へる岬の灯 美濃 千古庵 翠 積

九華城下の汀庵兎月雅臺にはこたひ正風水音社の其地の分社長を繼承し給ひ今日や其披露の清筵を開き給ふ不肖亦其末班に列るの光榮を得聊か蕪吟一句を物して祝することしかり

啼く聲の四方に響くや浦千鳥 美濃 心静軒 風 竹

角文字の伊勢の國桑名の里なる汀庵兎月雅兄の此度分社長を拜受せられけふやその立机式を擧らるゝに臨み蜂要一章を呈して祝し待るに南牟

香も高く色又まれや菊の花 美濃 老杉軒 卜 年

桑名の里なる汀庵兎月詞宗の文臺立机賀筵を祝きて

冴る月間遠の海の底深し 美濃 静々庵 雲 裏

汀庵兎月詞宗の立机を祝し待りて

木も草もなひくや鷹の其羽風 美濃 鶯語亭 梅 雅

汀庵兎月詞宗の立机を祝して

冴へ返る汀の月やけふの曠れ 全 半 幽

以下前書あるも之を畧す

美濃

白菊の咲くや祝ひの庵かほる	<small>松楓庵</small>	秀 齊
けふふそは一入かほれ蘭の花	<small>北方</small>	無 隱
其徳にけふの曠ある頭巾かな	<small>全</small>	嶺 雅
香に人をひく力あり菊のはな	<small>高須</small>	一 枝
枝高く咲いて香るや冬の梅	<small>大垣</small>	浦 月
錦着てここに目立つや紅葉山	<small>全</small>	稻 生 女

長久に机を照らす月夜かな 全 錦石  
 萬代も香る色香や菊のはな 下中島 撫舟  
 山いくつふまへて出たり秋の月 岐阜 楮山  
 香の立つや春に間遠の浦の梅 全 露眞

問遠社第十一世行庵詞宗の立机式を祝して

伊勢の海のいよ／＼濶し小春風 謬々園 翠濤

東京

文臺や月も貴き二見瀉 三世 老鼠堂 機一  
 今日日月汀の庵の眺哉 九世 其角堂 永湖  
 月に直す机や秋も闌に 江戸庵 機文  
 けふを香に立し十月櫻哉 六病庵 才古  
 寒菊もよき日を受けし照り葉哉 四世 木耆庵 春塙  
 霜月や喜ひ事の机 五世 有竹居 南甫  
 空高く菊の日和の据りけり 狂而堂 風湖

高き香に空も澄けり菊の花 十一世 雪中庵 東枝  
 繼橋もなむ無く越ねて紅葉哉 子規亭 六華  
 望月の玉こやいはむ葡萄かな 雪鏡人 二松  
 月を指す手に花もあり聲もあり 雷堂 龍雨  
 筆硯月澄む膝のあたりかな 五世 木谷庵 釣雪  
 はせを葉の廣き影あり秋の月 詠雪庵 柳雅  
 白菊や主は村の美髯公 接天居 水光  
 時得たり立つる机に月明り 麥林舎 雨静  
 凜とした咲きかまへなり冬牡丹 不光庵 千玉  
 其の曠を鶴も舞ひけり菊の宴 五世 東杵庵 蕪齊  
 別れ根の菊も大きう咲きにけり 甘々居 芋丸  
 改めて霜月の日の尾花哉 五味庵 松塘  
 樓を吐く蛤こなれこの雀 壽山居 寶舟  
 船一つ輝にある小春かな

浪の花咲せし月の汀かな  
 房くさ冬を立派に牡丹哉  
 勝菊の名のりを上げて香のはしり  
 月の船控手にこの人得たりけり  
 初冬や分れて高き水の音  
 色替る傳世に立つさまや門の松  
 水音や汀に光る水の浪  
 よき人の集ふ桑名の小春哉  
 喜を卯の羽かさねや祝ひ衣  
 神風の伊勢を誇れよ月の秋  
 名月を乗せて塵なき机哉  
 影庭にみちて榮ゑあり竹の春  
 名月の今宵兎の跳けり  
 水音に親しみてこそ月の人

梨花園 肖雪  
 芳樹園 羅丈  
 桃園 素角  
 少有洞 華城  
 惟水菴 墨俄  
 甘雨菴 芳風  
 梅堂 賀老  
 豊秋園 喜久丸  
 指頭菴 耕石  
 雪操居 松宇  
 黄雨  
 猿男  
 井々生

人まれの汀に照るや冬の月  
 色替へぬ松間に高き千木を見る

狂雷堂 顧十  
 一普

据へ初の机も曠れや喜久日和  
 常陸

江面菴 富寶

仰き見る峯は紅葉の錦哉  
 大坂

旭峯

雪晴れて汀の松に旭哉  
 改めて今日から菊の主人哉  
 新らしき机や菊を真正面  
 月高く冴へて書齋の窓に入る

長榎軒 甘泉  
 霞谷  
 露秋  
 直川

いさほしの光る机や冴へる月  
 咲き初めて香は高し菊の花

名古屋 文好  
 百嶺

朝夕の丹精見えて豊の秋  
色も香も整ふ菊や朝ほらけ  
佐屋 風 來  
彌富 里 樟

越後

折も今開く文臺に菊のはな  
廣くこ文開かれよ雪の道  
村上 老樹園 一 桃  
村上 點 蛙  
其の道の榮ふ柳の芽張り哉  
松野尾 紅 雪  
菊香る窓の賑ふ立机かな  
全 一 鶴  
菊咲いて目出度き今日の祝哉  
全 櫻 洲  
植ゑ込みし菊や朝日に香を配る  
全 秋 月  
菊咲くや佳人の集ふ君か庵  
和納 良 大  
文臺を照す名の夜の光かな  
村上 菊 園  
虚に實に廣し二見の小春晴  
全 知 足  
菊の香や南へ直す文机  
全 如 松  
花も實もやかては飾る紅葉哉  
全 竹 圃

白菊や生けて見たれば猶白し  
全 溪 石

越前

富貴いれた机に映る玉兔哉  
敦賀 紫雲亭 輝 風  
文机の百千代冴へむ道の花  
松岡 早縁庵 古 淵  
桃の咲く月の庵や立つ机  
粟田部 松月庵 花 翁  
彌榮ふ文の臺や今日の月  
大野 松翠舎 漣 月  
その中に一輪の菊香り覺  
福井市 松蔭舎 文 湖  
底知れぬ幹の力や雪の松  
大野 和樂庵 歸 耕  
見上れ婆富士にらんで鷹の舞ふ  
塚町 春清庵 吟 野  
月出て汀へ群る千鳥哉  
武生町 八十二齡 鶴壽園 松 翁  
早咲きの梅や旭も扇形  
全 花吹仙等 也  
陰徳に餘光のあるや今日の菊  
新横江 祐 志

和詩

大和あゝるも 虚實自在に  
塚町 不二庵 月 居

正しき身こそ 樹てる功し  
 八千代替らぬ 道も榮へて  
 年經る松の 月そ尊き  
 立机天長地久と豊の秋  
 粟田部 湖月  
 松見ゆる二見の里や龍田姫  
 全 皎月  
 撰まれし譽や冬の名取草  
 福井市 珀柳  
 福井市 友月  
 芳はしや四方に其名の香る菊  
 北新莊 松聲  
 秋晴に錦翳すや祝ひ人  
 村國 里月  
 永月の功も譽も薫る菊  
 全 鶴聲  
 薄雲の開いて功や玉兔  
 武生町 宗意  
 念入れて撰みし梅の接木哉  
 新横江 如流  
 功積める標や軒の藤袴  
 松岡 無底  
 長き世に道の香らん冬牡丹  
 全 聲外  
 世に廣ふ告げる響や冴へる鐘

千みて遠く仰かん冬の月 全 閑鷗  
 氣高きや風に磨きし今日の月 全 奇石  
 名にしあふ桑名に芽張る柳哉 全 稻香  
 置き直す机に菊の薫り哉 敦賀 一柳  
 暖き日のさして開くや冬牡丹 全 雅底  
 其徳の光や今日の露の玉 大野 去生

備前

四方よ香の立つ文机や初見草 福岡 夏水庵 朝翠  
 色も香も整ふ菊の譽哉 上笠加 願道庵 魯心  
 菊咲いて秋の淋しさ隠れ覺 下笠加 登々庵 耕雲  
 立ち初めの机薫るや菊の花 全 扇歌  
 末までも開いて匂ふ梅の花 上笠加 化遊  
 新しき机の曠や名取草 福岡 雨江

周防

色替へぬ松の榮へや立机式  
月影に開く虚實や二見瀉  
月の出て道も明るし花野原  
柳井 友和房 旭 柳  
全 旭庵 琴 水  
彌壽女

長門

松一木道の葉や冬の山  
雨に日に鍛はれて野の錦かな  
千歳に薫るや冬の名取草  
優秀の色香尊志翁草  
色に香に菊は二見の譽哉  
月の出て尙ほ鮮や紅葉山  
月受けて殊更松の見榮哉  
一筋の流に清し道の月  
松高く一水低し月の晝  
四方に名の照るや二見に昇る月  
長門 東漸庵 踏 海  
秋吉 椿庵 金 卮  
全 可 耕  
全 莞 爾  
全 道 夕  
全 刀 水  
全 松 月  
全 鴻 洋  
全 一 信  
梅 枝  
樽崎

梅紅葉机の上の紅葉哉  
月雪の代々に光るや二見瀉  
樽崎 花 宿  
美禰 桂 水

鳥取縣

水音は高し汀に月の影  
日の照も裏表なき紅葉哉  
爽籟や池の汀に菊盛り  
子の爲めに上り切つたる雲雀哉  
喜こはぬ者なし今日の月の晴  
見仰れは富士より高し今日の月  
菊活けてから向はるゝ机かな  
新しき机に照るや今日の月  
鳥取市 無常庵 世 外  
全 格 雨  
全 不 搖  
多高郡 美 晴  
全 琴 雅  
全 壽 子  
伯耆 八十九齡 信 和  
全 素 水

播磨

澄切つて月は限なき光哉  
静閑堂 美 仙

伊豫

玉巻いて繁る芭蕉の一葉哉

清水町

梅丘

朝鮮

菊の花咲くや八千代に香べき

釜山

古仙

菊の日や書院に榮ゆる新机

慶南

作樂

天地に溢るゝ菊の香哉

草梁

青美

紀伊

世に薰る机や花に月雪に

七十四叟  
尾鷲 細々園

淇水

志摩

今日のよき日君ほく紅葉旭に映ねて

鳥羽 面白庵

可笑

伊勢

艶を譽め又味譽めて今年米

七十三叟  
多氣郡 翠蝶園

青邨

また一つ増へし田毎の月冴ゆる

七十五叟  
宇治山田

苔青

海上に月あり耳目更に新なる

全二世 一點庵

椿堂

よき庵の出来て喜しや菊の花

津市

犬曾

菊の香や机の上の俳諧史

宇治山田

蒲公

月の出て見上る松のふどり哉

安濃

松翠

月の出て奇麗に踊見る夜哉

全

苔溪

菊咲いて香添へけり花の園

全

谿月

菊の香に窓明けて今日晴るゝなり

松坂

青柳

咲く貴久にいよゝ氣高き園生かな

一志郡

柳月

秋晴の不二は氣高き姿哉

白子

弘琳

光り増す月に隈なき机哉

神戸町

樂鶯

月一つ小舟に分けて眺めけり

庄野

撰笑

静々ご上りて清し松の月

全

喜樂

名月や天満宮の陳高し

三重郡

香楓

千輪の根は一本の小菊哉

全

員川

末廣く水音高し秋の空

全

半川

菊の咲く日柄も彌々天高し

全

流人

杖ついでこれから咲くや菊の花 全 香川  
 菊薫る庵や机の置きところ 四日市 霞松  
 悠々さ朝日うけさる黄菊哉 全 茂祐  
 仰き見る今宵の菊の清さ哉 桑名 南柯  
 目出度さのきはみそ今朝の秋晴れて 全 九子  
 雲井まで届く香や菊の花 全 梅友  
 勝菊の譽も高き香哉 全 其櫻  
 梅香る窓や机の置きところ 員辨 紫山  
 枝ここに千代の榮の小菊哉 桑名 翠園  
 香は闇にかくせぬ梅の薫哉 全 柳月  
 園高く海邊も見ぬて菊薫る 荷支  
 高らかに猩々の一句菊の庵 桑名 一と

紅葉して實に絶景の汀かな 桑名 風空

白梅の闇を貫く香哉 王川社員 錦月  
 名も共に世に出る庵や寒牡丹 全 皐月  
 白菊の一重に深き薫哉 全 葉舟  
 水音や冴へて間遠の冬の月 全 五形  
 幾千の花に秀て、菊薫る 全 古松  
 菊薫る窓に据へけり文机 全 琴聲  
 大任をはたして梅の主哉 全 水月  
 菊咲いて翁の雅知られけり 全 笑風  
 名實の備る庵や冬牡丹 鶯蛙會員 茂里  
 我里に名たゝる庵や冬牡丹 全 暮白  
 不足なき庵の備へや菊の主 全 都柳  
 小春日や間遠に曠の新机 問遠分社員 保石



霜除けに着せる檜笠や冬牡丹 全 茶友仙 檜

十徳や紙衣に變る今日の曠 男 月 圓

月もけふ一際冴へる思ひ哉 男 月 汀

父君の立机に際し庇護聲援の深かりし師家並に諸賢に  
感謝すると共に祝意を表し侍る

冬牡丹咲くや日の恩雨の恩 男 月 步

自 祝

加牟加是の伊勢の國桑名の郷はその昔 芭蕉翁の  
度々留錫せられ地藏堂の草枕には曙や白魚しろき  
事一寸と大谷派の御坊に詣ては冬牡丹千鳥よ雪の  
時鳥と高吟あり又近き多度神社の廣前にぬかつき  
ては宮人よ我名を知らせ落葉川の秀詠もありて其  
の遺跡頗る顯著なり第二世獅子老人も草鞋をこめ

られしこと繁くして吟詠も又少からさりしか身ま  
かられし後その遺骨を乞ひ受け雲裡坊之を分葬せ  
られ程なくして美濃北方の鑑塔に働ひて梅花佛の  
碑碣を本願寺の院内に築き以て東海道往來の途次  
に各國風士の參拜するの便りさせらるゝに美濃  
の國とは公私を問はず雅俗と云はず常に唇齒補車  
の關係を有するを以て俳壇もいと賑なりしか世外  
の遊ひにも盛者必衰の理に洩れず近頃其俳諧を味  
ふもの僅に片手の指を屈するに足れりとは實に慨  
歎の極みなり曩に獅子門道統十七世千秋庵老師は  
之れか頽風を挽回せんごわさく當地に曳杖せら  
れ時雨庵をして第九世を立机せしめ數年ならずし

て雪朝庵は第十世を繼承すしかも俳壇の妻非日を  
追ふて加はるを以て老師は痛心の餘り不肖等をし  
て斯道を補佐せんことを懇懇せられしも公私の俗  
務に忙殺せられ爲にその重任を完ふし得さりしは  
常に遺憾とせしところなり然るに歲月は弦を離れ  
し矢よりも速く知らず識らず十數年を経たりしか  
前代雪朝庵主は昨年仲秋他界せられ未だ袖の涙の  
乾かざるに亦千秋庵老師は今年孟春の項に白玉樓  
中の人と化せらる嗚呼不孝の兒は親を失ふて後ち  
親に孝たらんことを思ひ不悌の弟子は師を見ざる  
に至つて其悌ならんことを悔ゆと詢に然りとす余  
や既に知命の坂を越へ亦何をか爲さん唯斯道の友

と共にこの地に俳縁の絶へんことを恐るゝのみな  
りしか近頃瀕に老友門子の推舉と獅子門道統十八  
世古今庵大宗師の勸誘をうけ又いさゝか感ずる處  
もあれば薄識短才を顧みずされこれの聲援を杖と  
し師家の庇護を笠としてこゝにおこがましくも正  
風水音分社の文臺を繼承し待るに南牟

汀庵

其寂を聞き果さはや初時雨

文臺繼承報告句陀羅尼

龍集已未冬十一月十七日社中の諸風士と共に本願寺精舎、境内の梅花  
佛の鑑塔に額を再拜し侍りて猶山茶花を通題としておのくの吟詠を  
集め之を手向奉るにそ

古今庵

杖曳てけふ山茶花を捧け、り  
 山茶花や昔を忍ふ御分靈  
 山茶花の白き心を手向哉  
 跪く塚に山茶花笑ひけり  
 額つけ婆山茶花匂ふ碑の御前  
 山茶花や仰け婆白き鑑塚  
 山茶花の盛りも長し塚の前  
 山茶花や咲き揃ひたる塚の前  
 山茶花や塚に桑名の一と名所  
 其儘に山茶花一枝捧け、り

卜年 雲裏 風竹 半幽 石田 月華 花笑笑 月月笑 月柯

山茶花と向合ふ塚や梅花佛  
 山茶花の香は線香と交りけり  
 山茶花も笑みを映すや塚の前  
 分骨の塚や山茶花咲き榮

一月峰 一信 梅雅 甘泉

○

山茶花やけふ分靈に初仕へ

汀庵

星次已未の十一月十七日白魚塚に詣てたる

折からの吟詠をしるす

枯蘆や木枯ならぬ風の音  
 かれて猶ほ美妙の曲や芦の風  
 枯芦の間を釣舟のゆるき哉  
 枯芦や仰けは高さ白魚塚  
 枯芦を捧けて慕ふ道の恩

古今庵 卜年 雲裏 風竹 半幽

枯 芦 に 引 く や 間 遠 の 浦 の 靄  
 枯 芦 や 泥 に ま み れ た 狩 の 犬  
 枯 芦 に 集 ふ 夕 邊 の 雀 か な  
 枯 芦 の 間 や 淡 き 月 の 影  
 枯 芦 の 波 に 見 ゆ る や 風 の 筋  
 枯 芦 や 淋 し さ 見 せ て 鳥 の た つ  
 芦 枯 て 變 る 乘 場 や 渡 し 舟  
 枯 芦 の 入 江 や 低 ふ 飛 ふ 小 鳥  
 枯 芦 の 天 籟 を 碑 に 手 向 哉

梅 雅  
 甘 泉  
 月 華  
 月 笑  
 一 信  
 花 笑  
 月 峯  
 石 田  
 汀 庵

友 ち と り

補 興

照 源 精 舍 二 於 テ

第 一 席 展 觀 席

祖 翁 筆 跡 並 二 十 哲 軸 物 貳 拾 幅

獅 子 門 道 統 家 十 八 代 軸 物 拾 八 幅

桑 名 間 遠 社 文 臺 拾 壹 代 軸 物 拾 壹 幅

第 二 席 煎 茶 席 茗 主 伊 藤 仙 檜

書 院 待 合 席

床 去 來 贊 許 六 畫 眞 帆 片 帆 花 寒 牡 丹 花 人 唐 物 籠

柱 掛 勝 杖 ( 千 秋 庵 の 匂 入 ) 香 爐 竹 泉 造 秋 邨 畫 贊 均 窯 三 足 式 畫 帖 竹 田 翁 畫 贊 古 桑 寫 卷 物 越 人 判 歌 仙 行

野庭

賣茶翁茶棚 平野古桑書贊

涼爐 竹泉赤膚燒  
山田介堂書贊

爐座 竹泉  
青磁丸形

湯罐 道入寶珠式  
山田介堂贊

水注 竹泉  
平野古桑書贊

茶銚 先代竹泉  
三友居形 田近竹邨書

銚座 唐物集木  
角形

茶心壺 純錫藏六造  
池田桂山書贊

茶量 桐庄兵衛作  
田近竹邨書贊 袱紗 山田介堂書贊

茶盞 竹泉  
河野秋邨書贊

搥子 木丸形  
田近竹邨書贊

巾筒 竹泉  
河野秋邨書贊

香盒 竹泉  
河野秋邨書贊

烏府 手附籠  
河野秋邨書贊

吸出シ茶盞 道八  
山田介堂書贊

菓子器 竹泉  
河野秋邨書贊

菓子 冬籠り

第三席 扶茶席 山内茶寮 主 栽松會

待合

掛物 守景筆蘆雁

水指 備前耳付

料紙硯 元伯好一閑作  
碌々齋書付

茶器 宗旦棗  
原叟書付箱共  
外箱碌々齋

掛物 蕉翁當城下  
行脚句入文

茶碗 啗啄齋手造黒  
銘一興  
箱甲了々齋

花入 朝鮮唐津

茶替 出雲燒伊羅保寫  
岡田伊勢守箱書付  
惺齋作

花 紅滿作 佗介

茶抄 句銘  
けふばかり人もとしよれ初時雨

釜 初代寒雄作霰丸  
神樂丘不入箱書付  
けむくと耳にも寒き雉の聲

香合 染付開扇

建水 海松桶  
蓋置 青竹

炭斗 今日庵傳來瓢  
一駿齋句入書付

灰器 南嶺寫慶入作  
龐居士か籠にかゆるや種瓢

菓子 且入青海皿  
銘浦千鳥 花の舎製  
一閑籠地盆  
干菓子 山川

羽箒 鶴惺齋書付

以上

第四席

一摸擬店

山内庭園

第五席

一淺酌

愛宕山吞景樓



水音奈海響  
 空月離江多  
 如頰志清氣

視斯立机時  
 祝子繁宗道  
 立机式存史



おん

三平園はまや

このあまの

るよつと

まのまの

おん  
開



# 河庵兔月立机祝賀發句大會

正風獅子門道統十八世

首評

水音分社長

## 古今庵而行大宗師選

總句五千余章内

四季混題

天 神々のいます高根や残る雪  
 地 雨の虫殊更秋を深めけり  
 人 桐一葉二葉と秋を重ねけり

列次

捨た世に名の出る菊の主人哉  
 争ふた水も安々落しけり  
 秋風や潮に瘦たる磯馴松  
 雁啼や闇の裾切る潮明り  
 山にあり野にあり春の人心  
 色替ぬ松や鎧の名に残り

美濃 卜

年

桑名 保

石

桑名 雅

雄

桑名 全

人

桑名 保

石

尾張 文

好

桑名 雅

雄

伊勢 獨

笑

美濃 猪

山

寝ても苦は盡ぬ浮世や花に風  
神垣は幾世の寂や蔦紅葉  
静さの底の抜てや露の音  
搔分て見れば月あり落葉川

右拾位

風になる潮先白し鳴千鳥  
月花の物語りして雪見哉  
鶯や梅を離れて老を啼く  
鐘一つ春の夕暮定めけり  
引鶴や名残の聲も雲の空  
晚鐘は聞きはつしけり今日の月  
更衣して踏にけり神の庭  
施しの水に味あり蟬の聲  
見ればある波に音なし春の海

桑名 雅 雄  
桑名 雅 雄  
桑名 保 石  
桑名 景 風

桑名 雅 雄  
福井 松 聲  
山口 其 水  
朝鮮 青 美  
鳥取 香 石  
美濃 梅 雅  
全 撫 舟  
大阪 霞 谷  
桑名 雅 雄

桐一葉風の爲めてもなかりけり

愛知 一 風

右二拾位

星一ツ 残して何處 郭公  
氣儘ほごすしきはなし草の庵  
涼さや月水にあり松あり  
目を閉て月見の雨を聞く夜哉  
歌種の松を残して枯野哉  
花咲きて雪このかたの夜明かな  
春の旅先つ伊勢路へさ向ひけり  
風入るゝ窓の工夫や夏隣  
庭掃て梅新らしき匂ひ哉  
飛ふ螢草に戻りて明にけり

右三十位

花の雲仰けは高し大悲閣

桑名 雅 雄

美濃 雲 裏  
桑名 雅 雄  
全 茂 里  
伊勢 月 洞  
越前 松 翁  
山口 金 卮  
美濃 錦 石  
伊勢 梅 友  
越前 輝 風  
美濃 雲 裏

月は未だ臘氣もなし梅の花  
松風は價の外やごころてん  
鐘氷る空や黒繪の寒山寺  
積善の庭に餘慶や冬牡丹  
よい智恵の出て膝叩く扇かな  
浮雲は海へ流れて天の川  
卯の花や初雪ほごの庭明り  
尼寺や今朝の落葉を夕煙  
動くほご風に音なき若葉かな

右四拾位

人の道踏めは涼しき心かな  
見て置きし様に案内や菌狩  
露の音座禪の耳に答へけり  
雲の中雲の潜るや秋の空

岡山 雨江  
桑名 掬泉  
越後 如松  
福井 松聲  
東京 喜久丸  
福井 松聲  
美濃 鷲山  
長門 雲外窟  
美濃 雲裏  
桑名 景風  
伊勢 月洋  
桑名 雅雄  
伊勢 錦月

我門に我ごそむ深雪かな  
入船の港薰るや今年酒  
風の隙ありて露持つ柳哉  
案山子にも同じ流行の着物かな  
寂を聞く松風古し初時雨  
涼しさや鏡にうつる帆掛船

右五拾位

絹をふむ足さわりなり春の草  
座右銘如意に刻みて冬籠  
虫鳴くや東寺邊りは田舎めき  
春風や自然さゆるむ笠の紐  
茶の水は花の中から流れけり  
藤咲くや貰ひ餌に飽く池の鯉  
狩衣を着せたる御田の案山子かな

長門 雲外窟  
福井 里月  
岡山 扇歌  
桑名 月歩  
新瀉 點蛙  
桑名 保石  
桑名 雅雄  
全 柳甫  
全 保石  
新潟 櫻洲  
山口 其水  
桑名 掬泉  
全 花笑

七草や覺へよき名の忘れ勝  
身の運や雲井に上る奴胤  
鶯や梅には神の名も附かす

山口花宿  
伊勢月柯  
名古屋文好

右六拾位

木枯の途切に高し瀧の音  
鈴虫や格子の外は京の町  
若草や耳に障らぬ雨の音  
金持になつた夢見て巨燧かな  
山莊の疊つめたし後の月  
出代りや出かはらぬのも身の譽  
怠たらぬ人の越よし年の坂  
誠より外に道なし神迎ひ  
堪忍は人もかくあれ雪の竹  
辻斬のある取沙汰や瀧月

越前歸耕  
伊勢月輝  
福井友月  
越後知足  
桑名柳甫  
岡山清川  
全松年  
全容迂  
桑名掬泉

右七拾位

馬叱る舌の廻らぬ新酒哉  
五戸の里武士の果なり網代打  
浮て行く鳥の番か春の川  
筍や不和の隣りも憚からず  
長生は蝶も茅出度し歸り花  
心にもよき種を蒔く彼岸哉  
朝寒や石切る人の身拵へ  
唇に墨のくろさや花戻り  
落栗や一つ二つは草の蔭  
人の手の届かぬ柿の一つ哉

桑名保石  
伊勢五形  
桑名南柯  
福井友月  
伊勢皐月  
桑名茂里  
鳥取不搖  
越後溪石  
尾張一風  
伊勢玉水

右八拾位

麥飯のすゝむ夕邊や秋隣  
捨もせて時代おくれの土用干

越後紅雪  
長門雪外窟

池の月底の抜けたる眺め哉  
鮫汁や舌三寸の無分別  
過去帳の佛探るや秋近し  
啼も一羽聞も一人や閑古鳥  
天外に心は飛んで冬籠  
引合の月を残して時鳥  
月包む雲踏みおこせほこゝきす  
合點して居てもものうし桐一葉

右九拾位

名月や松は千古の歌柱  
暗よりも月に淋しき桔野かな  
月涼し晝は急いで越た橋  
神苑に汲む若水や星明り  
秋晴れて名もなき峯の聳へけり

山口金 扈  
桑名掬 泉  
静岡法 月  
岡山扇 歌  
美濃卜 年  
朝鮮古 仙  
伊豫梅 丘  
美濃梅 雅

桑名雅 雄  
伊勢葉 舟  
全葉 舟  
全葉 舟  
全琴 聲

田作りや我が日の本は農本意  
風ほめて疊む日傘や夏木立  
けさ見ては土産にならぬ螢かな  
涼しさや圍ふて見ても灯の消ゆる  
ひゝらきも若葉に針を隠しけり

右百位

追加

初雪や海まで風の届き兼

判者 古今庵

伊勢笑 風  
全全 人  
岡山耕 雲  
伊勢柳 月  
岡山魯 心

越前 道統補佐 養松軒呼月選

天 聞くも一人鳴くも一羽や閑古鳥  
地 降り別ける音や時雨の蓑笠  
人 耳鳴の何時しか癒えて秋の風

備前扇 歌  
桑名茂 里  
桑名其 櫻

列次

桃咲いて壺中に永き月日哉  
雁なくや枕馴染まぬ舟宿泊り  
愚は遂に家起しけり蝸牛  
十六夜の闇の間はなし蕎麥の花  
福耳に溜る櫓火の埃かな  
皆露となりて消ゆるか曉の星  
褻脱いて客となりけり狸汁  
怠らぬ鍬の光りや豊の秋  
涼しさを月水にあり松にあり  
驚や明けて暫く竹の月

右十位

咲きかけて今日も暮れけり冬の松  
冬の日やこほれ日和を糊仕事  
涼しさを鏡にうつる帆掛舟

降りさうになつた温みや初蛙  
名月や松に幾萬露の玉  
尼寺や今朝の落葉を夕煙り  
蜩や流れにひたす草鞋喰ひ  
右左月の梅かな柳がな  
よき事の数は少し冬牡丹  
お降りは天地和合の初哉

右二拾位

白酒の客や桃色櫻色  
寐行儀の直りて蚊帳の別れ哉  
日に三度身を看て冬籠り  
儉約を明日からにして初松魚  
雪刎ねる竹や雀の添へ力  
美しき物の淋しき紅葉哉

美濃 梅 雅  
桑名 雅 雄  
全 南 柯  
因幡 美 晴  
大阪 露 秋  
桑名 玉 水  
朝鮮 青 美  
越前 輝 風  
桑名 茂 里  
全 柳 甫

越後 一 桃  
備前 無 底  
長門 雲 外 窟  
東京 喜 久 丸  
伊勢 喜 樂  
桑名 掬 泉  
大阪 霞 谷

伊勢 喜 樂  
桑名 月 步  
福井 松 聲  
大阪 露 秋  
桑名 雅 雄  
全 柳 甫

差添への細身召されて衣更  
戸ささねは寒しさりて今朝の雪  
おく霜の花となりけり月の宿  
花も夢錦も夢や眠る山

右三拾位

初雷や一寸嘶の後戻り  
孝の子に月も手傳ふ砧哉  
我罪を櫛て斗るや蜆賣  
白露や物に聲なき朝ほらけ  
霜の鐘馬もたてかみふるひけり  
寝るあてに取る宿てなし月の須磨  
乗り入るゝ響の音や霧の海  
煤掃いて灯も新しう思ひけり  
竹の子や犢の角に似たるほこ

全 全 人  
朝鮮 青 美  
伊勢 苔 溪  
美濃 卜 年  
山口 刀 水  
桑名 保 石  
越前 花 月  
伊勢 喜 樂  
桑名 雅 雄  
全 雅 雄  
全 梅 友  
美濃 錦 石  
越後 點 蛙

煙管持つ手には隙あり年の暮

右四拾位

解脱せし身にも浮世の蚊遣哉  
凡俗の知らぬ味あり露の音  
滿沙や笠ほこのこす岩の霜  
宿とりてからは美し雪の山  
月かすか沙鳴り遠し時鳥  
出陣の朝こは嬉し初松魚  
榻焚くや身分に過ぎし自然鍵  
讀書する子に灯を貸して砧かな  
苗代の延に伴ふ日脚哉  
松風は釜に譲りて時雨けり

右五拾位 (以下略ス)

尾張 文 好  
美濃 風 竹  
山口 月 泉  
桑名 月 峯  
全 保 石  
越後 櫻 洲  
桑名 畔 江  
越前 友 月  
伊勢 皐 月  
桑名 茂 里  
全 保 石

副評美濃 正風水音社幹事 一味庵石田宗匠選

天 天地の和らく風のひかりから  
 地 やこごなき人引き入れぬ朧月  
 人 長き夜の厩舎訪ふ灯かな  
 越前 湖月  
 桑名 柳甫  
 伊勢 蒲公

列次

横に日の照るや秋行く山の皺  
 義は山の重きに處して櫓の主  
 靈泉を浴ひて鳥立つ若葉哉  
 白粉の壺に挿したる葦かな  
 一船に紅葉明りや夕渡  
 儉約を明日からにして初松魚  
 霜の鐘馬もたてみかふるひけり  
 夜や長し親も子も泣く貰ひ乳  
 桑名 雅雄  
 全 花柳甫  
 全 春潮  
 大阪 露秋  
 桑名 雅雄  
 伊勢 松翠

赤 蕪車の上に時雨けり  
 白 桃の清き雫や朝の月  
 桑名 花笑  
 福井 月居

右拾位

春の旅先つ伊勢路へむ向ひけり  
 戀語る闇の上飛ふ螢哉  
 磯ふんて来た足かゆし朧月  
 思出の文寄せ張の紙衣かな  
 帆柱に蟬鳴く夕や満つる沙  
 聲低き母の謠や桃の花  
 あら波の中に静けし雪の島  
 魚の吐く泡から水の温みけり  
 草刈も立って鎌研く花野哉  
 老松の片腹白き吹雪かな  
 美濃 錦石  
 越前 輝風  
 東京 喜久丸  
 桑名 月歩  
 伊勢 青柳  
 美濃 猪山  
 鳥取 琴雄  
 越前 輝風  
 伊勢 月洞  
 桑名 月華

右二十位

雪解や日和に休む渡し守  
 菊日和静かに歌を思ひけり  
 差添へもほそ身召されて衣更  
 俎坂さなる岩もあり沖鯨  
 梅咲いて壺中に長き月日哉  
 禪も取りたき今日の暑さ哉  
 戀猫や外へ出れ姿變る聲  
 麗や檜の匂ふ神の橋  
 岩陰や蟹も瞬く秋の暮  
 白浪の立つ夜を狂ふ千鳥哉  
 右三十位  
 水色に若葉濃き靄離れけり  
 月の宿女の聲も交りけり  
 草の戸を訪へ婆客あり時雨笠  
 越前吟野  
 桑名雅雄  
 全柳甫  
 越前花月  
 美濃梅雅  
 越後一鶴  
 越前魯心  
 伊勢水月  
 尾張里樟  
 桑名月峯  
 東京一普  
 越前輝風  
 全皎月

國寶さなりし壁畫や風薫る  
 帆柱に百舌鳥鳴く暮の空赤し  
 碁は將に關ヶ原なり火取虫  
 名物さ聞いて蛤貰ひけり  
 初秋や山の裾引く朝煙  
 堂守は女なりけり糸さくら  
 汐風に夢路を蚊張のうねり哉  
 右四拾位  
 雲退けは悠然と山笑ひけり  
 濡れなから夕立ほめて戻りけり  
 船宿の借着短かし螢狩  
 浮齋の藻を喰ふ音や雲の峯  
 稻に吹く風も平和や御代の秋  
 水筋へ鳥の來て啼く深雪哉  
 伊勢阜月  
 桑名月華  
 全景風  
 全吟江  
 全都柳  
 全花笑  
 全人

桑名柳甫  
 東京喜久丸  
 伊勢紫山  
 越前雨江  
 大阪霞谷  
 桑名柳甫

魚飛んで水に聲あり夏の月  
桑名 月 歩  
敵陣へ星は流れて時鳥  
桑名 其 櫻  
紫の浪寄す磯や春の海  
桑名 花 笑  
萬能も反古に成りたる紙衣哉  
大阪 霞 谷

右五拾位(以下略ス)

追加

鳥叫ひの果や間遠の浦の風  
判一者 味庵

副評 備前 夏水庵朝翠宗匠選

天 御降りは天地和合の始め哉 大阪 霞 谷  
地 良風の吹く家柄や鯉のほり 桑名 茂 里  
人 もこのなさけありたし暖め鳥 越後 一 桃

列次

空はまた朧めく夜や時鳥 越後 一 鶴

浮く鮎の藻を喰ふ音や雲の峰 岡山 雨 江  
造る子も無念無想や雪達磨 越後 知 足  
名月や露の流るゝ給仕盆 桑名 雅 雄  
足ることを知れば着安き頭巾哉 東京 一 普  
千丈の白瀧包む茂かな 越後 一 桃  
人の道踏は涼しき心哉 桑名 景 風  
足元を雉子の羽たく木曾路哉 鳥取 壽 子  
善事を積み重ねてや冬籠 備前 化 遊  
手を曳て一家和合の花見哉 桑名 其 櫻

右十位

掛軸も戌申詔書や菊の庵 桑名 全 人  
家古き庭のかまへや松の花 越前 吟 野  
朝風に心養ふ青田かな 美濃 撫 舟  
長壽得て潜るや菊の不老門 桑名 雅 雄

白梅のいよくしろき月夜哉  
蟬啼くや酔覺ならぬ水の味  
寝た親を呼びに戻るや今日の月  
月かくす雲に聲あり時鳥  
更る夜の脊筋の寒むき炬燵かな  
水させは根の狂ふ牡丹かな

右二拾位

客乗て網うつ船や夏の月  
心よき流れの上や青嵐  
花提て蝶に追はるゝ廣野かな  
山にあり野にあり春の人心  
火の消えて寒き夢見る炬燵かな  
世を捨て庵の果報や時鳥  
營門にひらめく旗や初日の出

鳥取不搖  
桑名掬泉  
岡山清川  
伊勢錦月  
桑名花笑  
山口花翁

岐阜猪山  
越前輝風  
桑名柳甫  
伊勢獨笑  
桑名景風  
水戸旭峯  
伊勢水月

若竹や何所までのひる育振り  
松茸や確か去年もこの當り  
花曇り雨になる氣はなかりけり

右三拾位

一人搗く水から白や閑古鳥  
梅か香や綴り上げたる菅公記  
四阿に茶の湯泌るや初紅葉  
稻の波豊かな御代をうねりけり  
濡色は時雨の寂ひよ檜木笠  
雨晴れし朝や野山の初霞  
根も無て廣かる雲や秋の風  
笑ふても唇寒し水仙花  
初秋や山の裾曳く朝けむり  
文月や子も雲指さす智慧のつく

伊勢紫山  
桑名柳甫  
山口金卮

大阪霞谷  
桑名茂里  
桑名暮白  
岡山清川  
桑名風月  
伊勢月柯  
山口梅枝  
福井古淵  
桑名都柳  
大垣鷺山

右四拾位

誠より外に道なし神迎ひ	岡山松年
うつくしき戦やあめの若葉山	越前輝風
春の雪柳の雨さ成にけり	長門一信
探り得て香の立つ梅や文机	福井月居
薫りには闇無き梅の林哉	東京喜久丸
面白き春よ梅の戸柳の戸	桑名景風
飛行機の宙かへり見る小春哉	尾張里樟
石山に住む人ゆかし月今宵	桑名風月
白梅の白きに匂ふ月夜哉	桑名掬泉
稻妻や子を抱き直す橋の上	伊勢半川

右五拾位 (以下略ス)

追加

四方に香の立つ文机や初見草

判者 夏水庵

副評 長門 東漸庵踏海宗匠選

天 宿とつてからは美し雪の山	桑名保石
地 雲の中くゝる雲あり秋の空	伊勢錦月
人 悔れぬ体のこなしや三十三才	山口鴻洋

列次

雁啼くや闇の裾切る沙明り	桑名雅雄
涼しさや松の一路の海に入る	全南柯
遣羽子やいつまで若き廓の人	桑名掬泉
寐行儀の直りて蚊帳の別れ哉	桑名月歩
顔に付く髪一筋の暑さ哉	全月杜
松原や新酒の酔の捨處	越後一桃
道問へは日和を賞める頭巾哉	桑名掬泉
薬程嫁も味ふ新酒かな	全春潮

碁は將に關ヶ原なり火取出  
世の世和を上手に抜けて冬籠

右拾位

せく機に乳のこほる、師走哉  
裸ても格の備る角力取  
わさこ世を狭ふ垣して菊作り  
追ふ後へ追はれて來たり稻雀  
息あらしき賣人買人や初松魚  
朝寒やむし齒にさはる嗽水  
雪解や日和に休む渡し守  
氣儘程涼しきはなし草の庵  
松青し水白ふして紅葉かな  
涼しさや湯入りすまして長廊下

右貳拾位

桑名 景風  
山口 梅枝  
岡山 耕雲  
越前 花月  
尾張 文好  
伊勢 五形  
伊勢 喜樂  
桑名 春潮  
越前 吟野  
桑名 雅雄  
全 花笑  
山口 玉水

手にあたる物を晝寐の枕哉  
今朝見ては土産にならぬ螢哉  
秋晴や筑波にかける鳥一羽  
夜や長し親も子も泣く貰ひ乳  
見ておきし様に案内や木の子狩  
笑ふ子に泣く子に減るや窓の柿  
猿引や禮の言葉も唄の節  
持ちあるく様なり風の遠砧  
炭賣の得意廻るや小春月  
こり落す物の響や寒の月

右參拾位

闇よりも月に淋しき枯野哉  
膝なりに窪む疊や虫の宿  
乱杭に足袋干す家や三十三才

伊勢 葉舟  
岡山 耕雲  
伊勢 五形  
全 松翠  
全 月洋  
全 月泉  
伊勢 皐月  
全 月輝  
鳥取 香石

伊勢 葉舟  
桑名 雅雄  
全 九子

初孫を圍む家内や菖蒲酒  
虫の吐く泡から水の濫みけり  
蓬來や手をつけは鳴る青疊  
野に山に海にも花の雲り哉  
涼み臺話上手に取られけり  
一曲の琵琶に退きけり月の雲  
時雨るゝや足りにもならぬ頰冠

右四拾位

魚棚に花も活たり櫻綯  
桃咲くや十戸の村の道普請  
よき事のありそうな日や初燕  
承知して六ほす涙や唐辛  
蝙蝠や裾風呂煙る宵月夜  
空はまた朧めく夜や時鳥

伊勢月籟  
越前輝風  
桑名柳甫  
鳥取美晴  
越後紅雪  
大阪露秋  
伊勢苔谿  
山口桂水  
桑名梅友  
越後良大  
桑名春潮  
美濃清司  
越後一鶴

水鳥の水をはなるゝ嵐哉  
呼ひ寄せる様な螢や垣の内  
かまきりやたちた儘なる身の構  
打上て月に艶見る砧哉

右五拾位 (以下略ス)

追加

文便りに旅の花見る里報哉

判者 東漸庵

祝評 汀庵兔月選

天 それ鷹の眼するごき雲哉  
地 組板の鯉の尺さる扇かな  
人 動いては居れと静な柳哉

列次

桃咲て壺中に長き月日哉

岐阜梅雅

美濃風竹

備前花月

山口梅技

花に鳴く榮耀は知らぬ水鶏哉  
初雷やまた雪のある嶺より  
麗や花の褥にねむる蝶  
春寒し蒼みし儘の梅幾日  
風に隙ありて露もつ柳哉  
月もよき筈よ朝から響た空  
日に三度身を省みて冬籠  
二度に夜の明くるや庭の梅柳  
花の世を餘所に居眠る柳哉

右拾位

長閑さやさゝ波見せて遊ぶ鳥  
磯踏んて来た足かゆし朧月  
手を合す猿をかくまふ深雪哉  
白酒の客や桃色さくら色

周訪 旭 柳  
越後 點 蛙  
桑名 景 風  
岐阜 猪 山  
岡山 扇 歌  
静岡 法 月  
福井 松 聲  
越前 松 翁  
越後 良 大

岐阜 卜 年  
東京 喜久丸  
越前 祐 志  
伊勢 喜 樂

たたさへも暮安き日を秋の雨  
小鼓の音にゆるゝや糸柳  
釣瓶ふる袖また寒し梅の花  
置く露の花さなりけり月の宿  
出代や出代らぬのも身の響  
足からも妙な手を出す角力かな

右貳拾位

月はまた朧氣もなし梅の花  
鷹狩や錦の上の飾り蓑  
夕立をよそに見る日の暑さ哉  
足らすことも事足る家の袖味憎哉  
陣笠に音のして降る霞哉  
急く機に乳のこほるる師走哉  
石投けて月を動かす涼み哉

桑名 月 峯  
桑名 花 笑  
美濃 鷺 山  
伊勢 苔 溪  
越後 知 足  
福井 宗 意

岡山 雨 江  
桑名 雅 雄  
鳥取 美 晴  
伊勢 紫 山  
桑名 一 信  
岡山 耕 雲  
桑名 畔 江

叩かれて相場踏まるる西瓜かな  
取落すものゝ響や寒の月  
石ひこつ神にゑてあり花すゝき

伊勢 溪月  
鳥取 香石  
長門 一信

右參拾位

美しくしき戦さや雨の若葉山  
咲きかけてけふも暮けり冬の梅  
落葉かく鳥居の奥や沓の音  
十か十似て似ぬ物は瓢哉  
誠より外に道なし神迎ひ  
梅咲くや寒ひと云へこ春は春  
遣羽子の三日となりて上手かな  
千丈の白瀧包む茂りかな  
落栗や寢耳に音を捨ふ數  
美しくしい娘啞なり桃の花

越前 輝風  
伊勢 月籟  
桑名 柳甫  
大阪 霞谷  
岡山 松年  
伊勢 茂祐  
全 五形  
越後 一桃  
福井 古淵  
桑名 南柯

右四拾位

狗の子の重なつて寐る霜夜哉  
夏の雲空しくけふもちりにけり  
夕立や追はれくゝて牛の行く  
淑な身の振舞や辻か花  
飛螢くさに戻りて明けにけり  
隱家の宵寢を叩く水鶏哉  
やわらかな枝の戦さや若楓  
後ろ手に馬曳いて行く花野哉  
庭掃除した夜は遠し虫の聲  
掛乞の掃除して居る火鉢哉

桑名 柳月  
全 掬泉  
全 月歩  
美濃 稻生女  
美濃 雲裏  
伊勢 水月  
伊豫 梅丘  
山口 月泉  
長門 雲外窟  
鳥取 不搖

右五拾位

長閑さや海は吹くやら帆の動く  
花散るや打廣けたる孔雀の尾

伊勢 月柯  
桑名 月汀

客らしう隣へも行く御慶哉  
置く霜や波の届かぬ杭の上  
用一とつ忘れて戻る寒さ哉  
朝霧や無事を呼合ふ船と船  
鯛洗ふ刎井の水や花吹雪  
陽炎や砂に消へ込む波の先  
宮島やいさよふ内は灯の見ゆる  
飛行機と云ふ間に遠く霞みけり

右六拾位

燈火の油聲もして夜寒哉  
朝顔やまた淋しさもるらぬ秋  
打上けて月に艶見る砧哉  
秋雨や焼く魚の香に黄昏かるゝ

伊勢 錦 月  
山口 其 水  
桑名 翠 園  
伊勢 月 洞  
全 香 川  
桑名 都 柳  
全 保 石  
大阪 露 秋

かくれ家も隠れぬ菊の匂ひ哉  
結ひ去る神籤の殻や歸り花  
けふも亦よき日の入や稻の花  
うらゝかや柳に掛けし鞠袴  
ひさり傳に鳴る鳴子かち秋の行  
火の儘の火鉢も賣るや年の市

右七拾位

時待つた落付き振りや笑ふ山  
鋏持つた果にはあらし櫓の主  
四つ這に負けておかしき角力哉  
秋晴の山を數へる二階哉  
雨の夜の枕に近き沼太郎  
遣羽子やいつま傳若き廊の人  
たまゝに笠乾く日や合歡の花

桑名 春 潮  
越前 湖 月  
備前 朝 翠  
桑名 雅 雄  
東京 一 普  
山口 可 耕  
越前 漣 月  
尾張 文 好  
越前 菊 圃  
東京 芳 風  
尾張 里 樟  
桑名 掬 泉  
越前 鶴 棲

更衣して踏みにけり神の庭  
峰晴れて秋立つ雲の流れけり  
老松の片腹白き吹雪かな

右八拾位

晝顔や花に照り込む日の匂ひ  
梢から蝶もこほれて散る櫻  
遣羽子やおさな心になりし母  
鑄掛師の鞆に散るや桃の花  
國寶さなりし壁畫や風薫る  
静さや露の中から鶏の啼く  
書に飽きし寄宿の窓や合歡の花  
漕もせず碇も入れず月の船  
身の光飛んで顯はす螢哉  
蕎麥の花隣は遠き山家哉

美濃 撫舟  
桑名 九子  
全 月華  
鳥取 壽子  
朝鮮 古仙  
美濃 一枝  
朝鮮 青美  
伊勢 皐月  
全 玉水  
全 蒲公  
全 半川  
越前 吟野  
伊勢 弘琳

右九拾位

川柳や水悠々山翠し  
頼もしき月やまるみの足らぬ内  
袴着て出る手へ渡す扇哉  
物思ひするか砧の乱れ打  
夕顔や暑さ忘るゝ花の色  
一羽こは思へぬ聲や行々子  
秋晴や點々こして鳥高し  
親の名も云ふて響けり勝角力  
千田町や露に輝く旭影  
土器の御酒に影置く紅葉哉

右百位

桑名 月堂  
全 茂里  
福井 月居  
鳥取 世外  
水戸 旭峰  
大阪 琴石  
伊勢 青柳  
山口 金卮  
美濃 浦月  
東京 梅堂

木枯や軍鶏の胸毛の疎なる

追加

判者 江庵

伊勢桑名の里に好事家として稱揚せられし汀庵  
主はこたひ獅子門道統家より正風水音分社長の  
重任の依囑を受けけふの吉辰を卜して二見形の  
文台を披露せらるゝは詢に慶賀すべき事にこそ  
されや古語にも好事魔多しこの戒めもあれ婆希  
くは茶俳の三味のうちにわか宗風の宣揚に努め  
られんことを慇懃し侍るに南牟

一味庵

冬なから曠れや斜く良の時も今

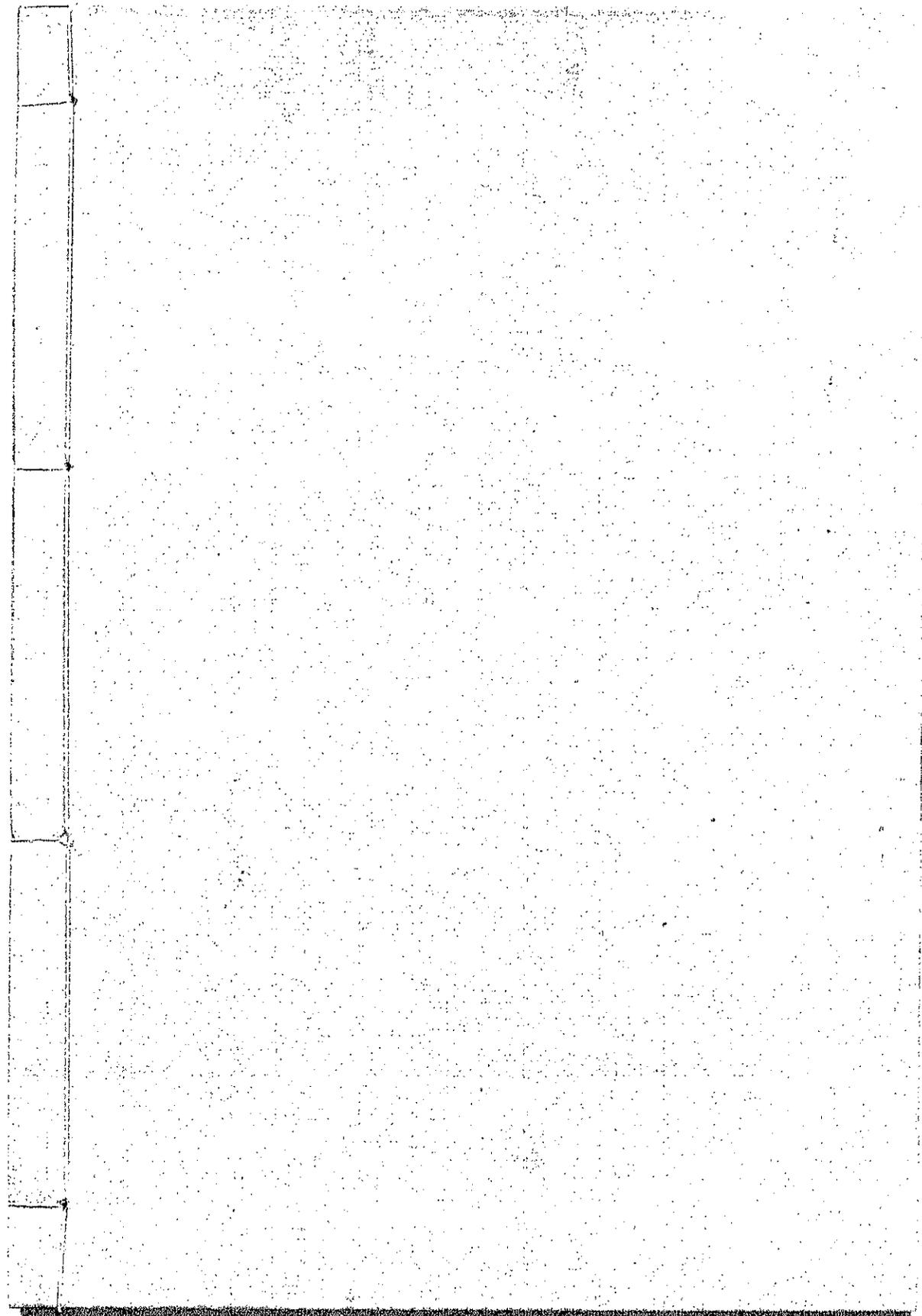
大正八年十二月廿五日印刷  
大正八年十二月三十日發行

(非賣品)

三重縣桑名郡桑名町大字宮通千三百五番地  
編輯兼發行者 千葉數太郎

三重縣桑名郡桑名町大字本町二十番屋敷  
印刷者 本多右一

三重縣桑名郡桑名町大字本町二十番屋敷  
印刷所 精文舎



友と

